

十字架の真相

ルカによる福音 23:1-49

（そのとき、民の長老会、祭司長たちや律法学者たちは）立ち上がり、イエスをピラトのもとに連れて行った。そして、イエスをこう訴え始めた。「この男はわが民族を惑わし、皇帝に税を納めるのを禁じ、また、自分が王たるメシアだと言っていることが分かりました。」そこで、ピラトがイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問すると、イエスは、「それは、あなたが言っていることです」とお答えになった。ピラトは祭司長たちと群衆に「わたしはこの男に何の罪も見いだせない」と言った。しかし彼らは、「この男は、ガリラヤから始めてこの都に至るまで、ユダヤ全土で教えながら、民衆を扇動しているのです」と言い張った。

これを聞いたピラトは、この人はガリラヤ人かと尋ね、ヘロデの支配下にあることを知ると、イエスをヘロデのもとに送った。ヘロデも当時、エルサレムに滞在していたのである。彼はイエスを見ると、非常に喜んだ。というのは、イエスのうわさを聞いて、ずっと以前から会いたいと思っていたし、イエスが何かしるしを行うのを見たいと望んでいたからである。それで、いろいろと尋問したが、イエスは何もお答えにならなかった。祭司長たちと律法学者たちはそこにいて、イエスを激しく訴えた。ヘロデも自分の兵士たちと一緒にイエスをあざけり、侮辱したあげく、派手な衣を着せてピラトに送り返した。この日、ヘロデとピラトは仲がよくなった。それまでは互いに敵対していたのである。

ピラトは、祭司長たちと議員たちと民衆とを呼び集めて、言った。「あなたたちは、この男を民衆を惑わす者としてわたしのところに連れて来た。わたしはあなたたちの前で取り調べたが、訴えているような犯罪はこの男には何も見つからなかった。ヘロデとても同じであった。それで、我々のもとに

送り返してきたのだが、この男は死刑に当たるようなことは何もしていない。だから、鞭で懲らしめて釈放しよう。」しかし、人々は一斉に、「その男を殺せ。バラバを釈放しろ」と叫んだ。このバラバは、都に起こった暴動と殺人のかどで投獄されていたのである。ピラトはイエスを釈放しようと思って、改めて呼びかけた。しかし人々は、「十字架につける、十字架につける」と叫び続けた。ピラトは三度目に言った。「いったい、どんな悪事を働いたと言うのか。この男には死刑に当たる犯罪は何も見つからなかった。だから、鞭で懲らしめて釈放しよう。」ところが人々は、イエスを十字架につけるようにあくまでも大声で要求し続けた。その声はますます強くなった。そこで、ピラトは彼らの要求をいれる決定を下した。そして、暴動と殺人のかどで投獄されていたバラバを要求どおりに釈放し、イエスの方は彼らに引き渡して、好きなようにさせた。

人々はイエスを引いて行く途中、田舎から出て来たシモンというキレネ人を捕まえて、十字架を背負わせ、イエスの後ろから運ばせた。民衆と嘆き悲しむ婦人たちが大きな群れを成して、イエスに従った。イエスは婦人たちの方を振り向いて言われた。「エルサレムの娘たち、わたしのために泣くな。むしろ、自分と自分の子供たちのために泣け。人々が、『子を産めない女、産んだことのない胎、乳を飲ませたことのない乳房は幸いだ』と言う日が来る。

そのとき、人々は山に向かっては、

『我々の上に崩れ落ちてくれ』と言い、丘に向かっては、『我々を覆ってくれ』と言い始める。

『生の木』さえこうされるのなら、『枯れた木』はいったいどうなるのだろうか。」

ほかにも、二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。「されこうべ」と呼ばれている所に来ると、そこで人々はイエス

を十字架につけた。犯罪人も、一人は右に一人は左に、十字架につけた。そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」人々はくじを引いて、イエスの服を分け合った。民衆は立って見つめていた。議員たちも、あざ笑って言った。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」兵士たちもイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱して、言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書いた札も掲げてあった。

十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」そして、「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と言った。するとイエスは、「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。

既に昼の十二時ごろであった。全地は暗くなり、それが三時まで続いた。太陽は光を失っていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られた。百人隊長はこの出来事を見て、「本当に、この人は正しい人だった」と言って、神を賛美した。見物に集まっていた群衆も皆、これらの出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った。イエスを知っていたすべての人たちと、ガリラヤから従って来た婦人たちとは遠くに立って、これらのことを見ていた。

説教

イエスは木曜日の深夜に逮捕され、すぐに裁判を受け死刑の判決となりまし

た。金曜日に死刑は執行されイエスは十字架刑で殺されました。しかし、イエスは日曜日の朝に復活します。

木曜日に弟子たちと「最後の晩餐」の食事をしたイエスはユダの裏切りによってオリーブ山で逮捕され、そのまま大祭司の家に連行されました。夜中にユダヤ人の裁判を受け、夜が明けた金曜日にローマからの執行官ピラトの裁きによって死刑が確定します。そのまま刑場に行き 12 時には十字架に架けられて午後の 3 時に息絶えイエスは死にました。木曜日の晩御飯を弟子たちといっしょにしたイエスは次の日、金曜日の夕方には殺され埋葬されました。土曜日はユダヤ人にとっては安息日ですので、ほとんどの行動は制限されています。墓参りもできません。日曜日になり夜明けをまって墓参りにいった弟子たちは「空の墓」を見て呆然とします。その後イエスのみ姿と彼の言動でイエスが復活したことを悟りました。

おおよそ 2000 年前におきたこの復活の奇跡がイエスをキリストとあがめるキリスト教の始まりとなりました。キリスト教といえば「十字架」がシンボルですが、重要なのは十字架刑で殺されたことではなく、イエスが復活した、死んで三日目に甦ったということです。

イエスは 3 年半ほど宣教活動したといわれます。この 3 年半という数字はイエスの言動について弟子たちがまとめた 4 つの福音書から推し量った活動年月です。いまからしてみればたったの 3 年なの？ けっこう短いなと感じます。しかし、ほんとうに大事なことはほんの一瞬のうちにおきることなのかもしれません。大切なことに気づくには時間がかかりますが、気づくということとは、まばたきする間、ほんの一瞬の出来事です。

イエスが生きているあいだに伝えたことは「神さまは人間のことを気にかけている」だから人はそれに報いるように生きましよう、生きてくださいね、ということでした。

このことをイエスがいくら口でいっても人々がわからないので、殺されても

生き返るといふ荒業を神はイエスをとおしておこなった、これがイエスの十字架の真相です。

人は生きていゝ間だけ生きていゝのではない、死んだら終わりといふわけではない。死んでも天国にいゝ、そして最後の審判があり、そのあと、まったく想像もできない新しい世界がはじまる。人の子イエスが死んで復活のキリストとなつたことを信じるこゝ、それがわたしたちの救いの道だといふのがキリスト教の教えです。

だからわたしたちは安心して、困つたとき、体が痛いとき、どんなこゝでも遠慮なく神さまに助けを求めましよう。ただキリスト教の教えでは、困つたときの神頼みにはかならず、イエス・キリストをとおしてお願いすることを薦めていゝます。だから、祈り・お願いのあとには「イエス・キリストのみ名によつて」と付け加えてください。イエス・キリストのみ名をとおして祈るこゝは、神がそのひとり子イエスをとおして行つた復活の奇跡を信じて祈つていゝといふこゝのあかし、証明になるのです。

きょうから始まる一週間はキリスト教でも特別な週です。今日朗読したイエス受難の出来事は約 2000 年前の金曜日におきた出来事です。このこゝを記憶にとどめるために、とくに木曜日（18日）から土曜日（20日）までは「聖なる過越（すぎこし）の3日間」とされていゝます。イエス受難を想い、祈りの日々を肅々と過ごしましよう。
